

新たな観光を 創造する「地域力」



全体事業

平成25年度てしかが観光塾／
弟子屈高校観光甲子園事業／
てしかがなび(HP)運営／弟子
屈野外活動スキルアップ講習会
／街コン開催(ユースフルネット
ワーク弟子屈と共催)／地域の
宝探し事業(てしかがきらリス
ポット)／温泉川清掃／コンシ
ェルジュ養成講座／地場産品
の活用実態調査／弟子屈極寒
アートフェスティバル2014実施

- エコツーリズム推進部会** 町内のエコツーリズムでの地域振興を進める部会
- 情報部会** てしかが観光ポータルサイトを通じて、さまざまな情報を発信する部会
- 女性部会** 女性の視点での地域振興を進める部会
- 人財育成部会** 地域の観光分野における人財を育成する部会
- 食・文化部会** 地域の食文化の研究や地域食材のPRなどを進める部会
- 環境・温泉部会** 地域の環境保全や温泉に関する取り組みを進める部会
- UD部会** 地域のユニバーサルデザインを進める部会
- A&A部会** 芸術による地域振興を進める部会

誰もが自慢し、
誰もが誇れる
町づくり

「てしかがえこまち推進協議会」 という住民パワー

Conference



■H24年10月開催エコツーリズム大会



■H25年/温泉街部会事業 温泉川清掃の様子



■H25年観光塾の様子

以来、生まれ変わったように地域が動き出した。なにより地域住民が主役なのだ。住民であれば誰でも参加でき、個々の意見を地域づくりに反映できる場が、「えこまち協議会」の核であるからだ。

観光を機軸とした取り組みであるが、地域づくりの原動力となる住民はもとより、商工業・農業など様々な産業と連携しつつ包括的な総合産業化を目指す過程で生まれ出る、地域経済の活性化が地域づくり、ひいては観光地の魅力づくりに役立つという。

いわく「これからの観光は、地域の魅力づくり(「お客さまが弟子屈へ来る明確な理由と目的」、そして地域全体で満足させて帰ってもらおうための「地域力」が大切)である」と。

その「地域力」の実現にむけて、8つからなる専門部会がそれぞれ独自に、時には連携して、多彩な事業展開を行っている。アイデアを出し合い活発な議論を重ねながら「誰もが自慢し、誰もが誇れるまち」を目指し、日々精力的な取り組みを続けている。

平成21年度には地域密着型旅行者「(株)ツーリズムてしかが」を設立するなどして、自然環境に配慮したエコツアーなどのプログラムを実施してきた。それらの取り組みが実を結び、平成23年度には第7回エコツーリズム大賞の優秀賞を受賞した。

これほど広範囲で活動する住民が「地域づくり」という共通目的の元に結集するということは、おそらく全国の市町村の中でも稀なケースではないだろうか。言い換えれば、それだけ弟子屈町の「えこまち協議会」を構成する住民パワーが本気であるという証左なのかもしれない。

そんな中だった。「誰もが自慢し、誰もが誇れる町づくり」をスローガンに地域全体を取り込んだ組織「てしかがえこまち推進協議会」(※以下、えこまち協議会)が発足したのは――平成20年の冬のことだ。

きっかけは国土交通省の認定する「観光カリスマ」の山田桂一郎氏による「自然と共生した観光リゾート地域とは」と題された講演会。地域経済が縮小する状況や全国で観光を重視する動きなど様々なデータを駆使した話に会場に集まった聴衆の気持ちはひとつになった。そして講演後、行政や商工会、旅館組合や観光事業者らが中心となり、地域再生に取り組みたいと協議し、山田氏へ助言を求めたことに始まる。

摩 周湖と屈斜路湖を擁する阿寒国立公園に囲まれた自然と、昔から湯治場として栄え温泉に恵まれた弟子屈は、道東を代表する観光地である。観光関連の仕事に就く住民も多く、農業と並ぶ基幹産業として長年地域経済を牽引してきた。

ところが、近年観光客が来ない。宿泊客数を例にすると、バブル期の終末―平成3年の73万4千人をピークにその後は減少の二途を辿り、平成25年には26万人へと大幅に減ってしまった。出口の見えない不況で経済が低迷している、団体から個人への旅行形態に対応できなかった、地域PRが不足していたなどなど、これまでも分析の結果は多々あったが、誰も衰退を止めることが出来なかった。